

近江輿地志畧

十七

冊 數	番 號	部 門
一	四	三
五		
三		

著者
永久

日	年	目
八	五	世
事	歲	紀
事	歲	日
事	歲	月

弘
正
之
縣
志
卷
之
七
十

膳所　大川辰清輯

神壽郡第一

一
支神壽郡の名を郡中一小竹崎せりカキトト久く名
久後壁、志賀原の半一志室有と郡名と改めかや
神壽也つとみえ神社有の故名から左ニ名付て神
壽村今は甲斐村と云ひ布記天智紀ノ神布の文
字も少。南至西ノ御水東は急又皆耶ノ葉々伊豫國
恩釋迦廟下隣り南と坤とは南上郡玉指し又地勢
界鰯魚の於小竹崎ア西の方伊庭山福宗川又甲寿

至る南北度一今代山上池田も漸く細んで草の上
櫻加納の多さ山並み又が一ノ度一は戸街道より西下
もとひ下の郡ともいは戸街石より東を上りて北の上
の郡とも

一 爰智川 駿河とも名取され川と神奇なる處を
大川とも名西と濱水のまへ越えて北の郡より
三重川下の北山新洞をうあく南山端まで木立の湖水よ
かれて海岸へと越えたり往きのためうい重の
折りわざ故山利あす福走へ山情より重あき井川
源々和泉川と和田村わふびて十村川と合へたる村
木か毛利

一 境をその町に横山の堂あり 今度て福雲寺有湯
村の半もよどみて湖に入じ

一 菩提院 甲斐村西川むら甲斐村もぬもち善光寺村
福永村三原村小川村をまよまや小川村等、栗見の名

木か毛利

一 甲斐村 神壽郡の極西北の濱湖をかくて太郎毛智川
の裏毛利甲斐とよき神壽と南村をまよ郡の名
など神壽郡とよき神のまゆと後まゆと毛利
とじとうと換わからずスラスラムエウムトハ通アラ左
小からと云ひてハヤ城と神無社神南神互考者加也

注せりを取く文字を寫り神壽を甲斐村上仰。延
永年中以來の事と直來以ての記録皆神壽村に管
轄又神壽村の神崎村と号はるゝが村も智川原町
側崎と焉寺と神社と一處と云ふと神崎村と云ふ
うち社と仰きの地へ、極めて久者より恨む所のまゝと
ちく硝へ木壽の字轉訛りよりかく俗呼し崎子崎と呼
須わ名抄神壽の字を義以今詳かく

廉壇州

神壽の荒落と見ゆ其は甚は甚ことを好んで居る所
一和爾川 濁西ツツハ豆風の庵と云ふ事ある佐賀村の

北より杜美川及び君御川と合して和爾川と名ひ一ツを
水晶巖といひ其盤曲して西へ流き鶴村飯高山の北面
て三流河と合ひ西へ流りこ又一ツハ鶴川の東流之
上井のあたりを走り麻生川と云ふ事ある佐賀村の
坂村背の山と云ふ事あり時を和爾川と有て
湖に入り乍り

一 杜葉尾川 濁ニツツハ蒲生及び水晶巖といひ小
さね川、流まで杜葉尾村の東より拂毛川と拂毛村と
て曲推して南へ流り杜葉尾村の北と云ふ事と二流と
あり杜葉尾村の北を走り君御川と有て智川と

か列毛都列トカク湖ノ也列

一 西川村

里壽村の東ノ方村ノ村ノ中毛加那神

寃怒の鬼小一月刻物の叶小石とあり一村多毛多物小

居してり

一 金泉坊座鍊跡

西川村ノ角村

土保相待坐泉坊山

佐々八坊ノ基貞山毛鹿山所住ノミ高島郡小石鍊不
領有トヨ同くあらす、但尼清泉坊の事也、清泉坊
の年ハ高島郡の候トセ利

一 里寿村

西川村の東山有也

一 子安地藏堂

里壽村有毛毛室泰宗洋と云ふ者年々

古昔より師女難産する、又弟も初生必死度たり
毛今毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛
毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛

一 稲立村

田寿村の東南毛毛村ノ南村ノ高村の牛坂

那鬼あり今は並れてニ村となり一村ハ鬼多郡

居波

稻立村毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛

寺福寺遺

高島毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛

とも今は丈とたゞかりとの事、是毛比用山の隙の處

也とて古事記。木像有て後子文拿りの年四子美

痕と消され、是後度御きの時代より事も明か

稻美大明神社

同村より玉神山洋

或々猿田彦神

として今豊大明神の今神を祀りよ

小川村

里壽村の東に、有村、吳村を祀る栗見の名

とまり或々小川の又字も以て下河内也。行平、末妻

地、住して小川左京進とも、永和院公方より平は後

高村

小川村のあゆより。

一

栗見北庄

南北に自ら分岐化の方を

栗見の名と云ひ車の方と栗見車の名から云々栗見の名
而庄村の名も亦海村を云々

一
本居山、鶴舞村の西山、若狭布と栗見へ
彦本山の名あり。彦山は庄の名也。建武の時、あを駒名
彦本陽子と也。彦代彦氏は、彦本の孫彦義有年は、物語
小山也。

二宮権現社

大禪師社

伏木山底に山内町所河原鬼太社立

一社の内上にて鬼神りを二宮権現十神師の事
經坐

觀音堂

伏木山外房子山中觀世音

一
界山山中、布多村の山中、有井と土保お守塔、并存する

起りと生次湯の界村に於て永保年中の惠利源が界村
を起人として西ノ庄地の主と爲る多度の事尾と云ひ地の
産子之洋小の物つゝ度

一 唐宮八幡社 畠井村に有栗見立社の其ニ度 立神 立神
天皇仁德天皇也

一 立神武 同村に有土佐侍は和天皇其皇子房明
親王が廟下にて仁明天皇の承和十三年の秋親王年
正鼎やうれて産子之送流ちもあゆに上並御金錢より往
すも天皇の寺裏處のきる年有産子の爲め改せり難きを
して南國毛知那産子村へ歸りて親王畠井とあり是後

一 畠井村官内玉の飯名は築りもとの所を土葬と
云ふ者坂山源と云題有の津原延吉葬司と云南國毛知那
食庭裡主の市中廟と云ひて之が坂後信用り
ト故れも前より少光父

一 新開村 武々野麻村の文字か一他まう畠井村の西
ノ庄引出村の末に相倚古む河内小治町あり原能と
云ひ弘安年中代は泰祖の時算井氏立坂大坂下赤い右れ
原能を先して倒立葬して田地とす一お盆はともに井能
新能とよ聞ある村也。至て廿二引出も朝元代と云度
一 永正の時とくと村家とある多島又新元氏の主と云ひて

一 粟見南庄 是粟見の名のものであつて粟見の庄の名とあつ

粟見新田 村福寺村で寺村新村河南河は泥寺村小川村

宮西村(古内小川村半八福島の庄)属セ)

一 粟見新田村 は近年の移用の地(新村)を事すおの村と

多尼吉も粟見大字神役の地(下)售天井寺(舊)改めて高

木原(上)に村名北生浦の屋敷と今にまの栗見(中世
氏家)ある。それ左小新田村の名(下)

一 福寺村 ひせ村の抄小引

一 野真(ケ)壽 福寺村(古名)古被土より生偽(是)新村

山あらぬ山瘦きの萬葉抄(後)中葉の後(上)て(附)壽(新村)

一 あま集(新)巻前(中)也生と、互草の(讀)タキ(新)の年
と云(引)立寺村(福寺村の事)古有村(新)也(せ)せ(も)りの盛(モ)
一 七百三十合

殿昭

夏竹代(新)も(新)の松(新)を(新)て(新)木(新)の(新)の(新)

玉吟集(新)の(新)の(新)の(新)の(新)の(新)の(新)

俊成

波不流(新)も(新)も(新)や(新)も(新)も(新)も(新)の(新)の(新)

達保石首

行春

白ゆ(新)の(新)も(新)も(新)も(新)も(新)も(新)の(新)の(新)

支本集

小秋吹(新)も(新)も(新)も(新)も(新)も(新)も(新)も(新)

風(新)吹(新)も(新)も(新)も(新)も(新)も(新)も(新)も(新)

夕暮(新)も(新)も(新)も(新)も(新)も(新)も(新)も(新)

月(新)も(新)も(新)も(新)も(新)も(新)も(新)も(新)

千載集

源雅光

哀サウ跡一鳴う侍の唐ノカガ立神はもづけ外

新古今集

乙條大納言

おとつじせし久侍の唐ノカガ立神はもづけ外

後拾遺集

源徳院

ひせ子と家の袖やちりりと春暮まう侍の林のス方

王丸集

人丸

生は鳥マ即侍う侍の漫風小殊庭ハ絶よき之次

風雜集

欣浦

あらばマ那ちう侍の漫風小名は千鷗立すをも第

鹿児太官

圓村も有無朴天海自在天神ニモ皆ノ天神

ヤモト一其渡太神ノミミ式を山上の天朴ノ。あ侍天主事中
島崎比良山の走りつ生光ひつて御上を五(廢)。嗚哀の志騒がれ
入更の内ふ松樹相生並無事え一條院の御末永記をゆて社主
達之と云あれ毎年四月吉日ノリ

ヒサ勝むう。福寺村の事ノ有けヒサ村の事ノある事
ア福寺村の事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事

新ひう。ヒサ村の事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事

阿南村。河津江主村也あひう。

河津尾堂村。新村也東玉野村也を河津尾堂也

一 境見在　此處は林神光寺村猪子村境有佐野村今
一 村控村、長勝寺村山曲村栗樹村中村小幡村和田村神
一 郷村勝那村主式は左歸在しもか生酒和多教覽
此鄉義政

一 林村　新光寺村の事也イ村之ニサル

一 那考平村　林村也す事也

一 猪子ひら　林町村の事西ふり村也

一 大隅大津社　猪子村より上保篠の支大津とも高弟
菱亞相の靈之萬広の產也神　もう徳永治郎壽昌勅請
事あり也　名蘿四月朔日

一 境見村　林光もそのあゆもア村ノ土佐或云恒母角
ハ恒母の玄のや一村一岐恒母村よりち歎ふ酒也宗の元
恒の里ニシム

一 新流吉今集

後光和

白竹の事ア取もて一神多事即日より花垣の事

一 佐野村　恒母村の事ある事御取ハ松村の事と八條
の事、安徳の移記より今古事の事例ほく恒母の

事の間未記にゆくも酒也名の事例也恒母の

事例も事例もかくアヒテ万葉集の師も三郎も左
豈可もつて、かたびの事。

一 善徳。佐野村。猪子曾洞流経金剛持の塔
御芳春庵の本堂。まね寄は太子の事例の玉函。や
度正上人の筆。おもむろに考究化石窟の。御勅の文
像。とる。太子形。の鏡。また。西から。新造の
も。毛の。而。磨。が。また。征伐の。ほ。地。よ。あ。ち。を。再
興。一千石の。ま。と。あ。附。あ。ま。す。猪。く。の。た
と。か。く。就。あ。ち。と。改。敷。じ。と。か。く。し。と。き。く。の。正。上。
園。甚。の。内。も。あ。ま。と。達。ふ。諸。萬。内。の。通。あ。く。る。京。と。り
原。文。觀。大。わ。あ。う。り。お。行。は。む。ハ。大。御。在。み。と。き。今。到
一 諸。七十。余。の。ま。金。無。算。う。と。と。や。う。も。あ。つ。先

橋。中。三。方。一。五。十。九。余。の。石。ね。の。け。二。印。年。下。も。ば。古。の大。門
毛。の。シ。つ。と。ま。か。小。松。下。と。四。櫓。と。里。ス。モ。も。ほ。古。う。の。櫓
一 五。九。と。五。九。の。階。層。う。と。一。五。波。回。往。き。の。そ。や。あ。ゆ。う。と。ま。
一 鳥。見。く。今。な。在。う。と。お。

せ。ま。三。方。一。五。万。や。と。活。勸。善。業。度。像。と。二。万。七。子。

鏡。も。ま。二。方。四。面。や。と。十一。面。鏡。も。と。三。人。半。す。多。は。大。子

の。ひ。と。

鐘。持。

一。丈。四。方。

庫。裡。二。方。四。面。

法。壇。

丈。六。方。

門。一。丈。二。方。

高。時。山。峰。也。あ。わ。く。ち。ア。石。立。ト。大。寺。ト。有。十。九。方。年。也。

ノホリ四半宵もやナニ宵ナリ

一 佐生村 佐生村のあより

一 佐松社

佐生村の西の山東上山にて四半の山腹地等
于ア左近山の北の山と佐生村の山とが接する
カレノ後多民の山谷ノモジノ山地ハ清風但のち風
寒風の通風清風也故あくわ山と呼ふ

一 今村

稻村の西より

一 地蔵堂

今村より北山地を望む所

一 稲村

今村の北より北山地の村名也敷の極
と生え立つかのえと云ゆ也稻村村名也

一 遠界寺 久松方の北山地より北山地二年江別栗

一本木始ノ穀の種と云う。北山地より北山地

車子ノ苗圃又トキモア種村ノシテモ北山地より北山地

ミテ仰藍屋三ノ種ふと云ひ物也と云う。北山地より北山地

カヌカノ種十二色引ノ言葉又トキモ北山地より北山地

ナリヌ穀の種大半の北山地より北山地

一 遠信舟 一 神代を回転過客者要旭山稻生雅

産靈寺の北の上生贊院等々杂駄中生立穀云是我

那の五穀の種ゆべしとの統合也。之等はもとより穀

種始てもうよいづれの種を以て生立穀云是我

善教寺
又穀の種天智の御み跡で御て天
多の御すり以てのくわゆして舍地とほかへる
附金の院也

一 善教寺
種ねあり種のもあせりともんが心も震
の時うちち紀日ア種のもあせりハ枝葉開土地下又穀
種正統千花故知也えし里也天年年行基蓋之邊
宝釋七年伽藍之地也前日有寺後山門之流下也數度
多大鳥有僅今有跡蓋本も難をす者行基之作

一 長勝寺村
柳村のああよらうお鴨せ一おまくせ

ちの坂門よりあよす村のあくえく

一 長勝寺
セ高の御すり種のもあせりともんが心も震
流の種うちち紀日ア種のもあせりハ枝葉開土地下又穀
種正統千花故知也えし里也天年年行基蓋之邊
宝釋七年伽藍之地也前日有寺後山門之流下也數度
多大鳥有僅今有跡蓋本も難をす者行基之作

一 長勝寺
柳村のああよらうお鴨せ一おまくせ

一 長勝寺
セ高の御すり種のもあせりともんが心も震
流の種うちち紀日ア種のもあせりハ枝葉開土地下又穀
種正統千花故知也えし里也天年年行基蓋之邊
宝釋七年伽藍之地也前日有寺後山門之流下也數度
多大鳥有僅今有跡蓋本も難をす者行基之作

一 長勝寺
柳村のああよらうお鴨せ一おまくせ

一 長勝寺
セ高の御すり種のもあせりともんが心も震
流の種うちち紀日ア種のもあせりハ枝葉開土地下又穀
種正統千花故知也えし里也天年年行基蓋之邊
宝釋七年伽藍之地也前日有寺後山門之流下也數度
多大鳥有僅今有跡蓋本も難をす者行基之作

佳香の洋所を立ち候の祖師也

一河曲村

も傷の村のあらわり

一巣鷹村

河曲村のあらわり

一中村

巣鷹村のあらわり

一小幡村

中村のものからすの官能をもつて

おもいはく本末のあわよく種村のきよと皆の小幡の
えうとみゆかえねば小幡の卿もと外へりはるの

一山邊ち浦ゆ社

山邊村より多う神の都ま

一の社とり跡

春日靈木

春日神社の境内より多くは靈の木也

一裏橋旧蹟

小幡村の内までとても古跡浮かぶ

一里の宿

萬鳥

立矢より近はりうきさくふ文とてう裏の橋

一木集

燒火盛

一巣くらまき者より多くは廻すがまのと

一古歌

沈くゑ

行と海よりうきとてうきともうかの鳴

一和田ひ

巣鷹村のゆきまく

一金子

萬鳥村より吉澤がうきむけ

一 燐の事あらえの村をもす
一 わゆと わゆ村をもす

新 おは

一味向ふの上庄くさのまき草ふやねりやくとし
一 古松社 わゆふよもう山麓へわゆふの浦へ云ひて云
角政頼の三男わゆ馬込シ松ちよ船行無事大崎連根行也有
泥水(木深)のれよ馬込シ松ちよ船行無事大崎連根行也有
太支賀ノ月立高島盛松家源清賀源清本村元清也有
一 蒲生を過ぎて慶祐わゆ馬込はれぐ考究松一色湯殿
春宮もみ其作の博漫然より作る義弱のむかよ

申之わゆと故ると聞て甲子年奉願之承原十二年九月
一 神鄉村 は界村のあづみもと伝教院宇宮、大河井
清吉も神鄉の名もと(或ノ由ゆ傳じて)之ゆ
引くもとをもす

一 宇賀大内ゆ社 申之わゆとを説くものゆのよ
一 築(築)古村も猪子村の表ゆ(多ゆ)と云ふ食
處志(志)神名也子所謂年か神社も(之)傳教院宇
太丸と云ちよ太わゆ顛の(此地)まう川(作)せ
せと要てもすともし云猪子村(有) 申之宇宮のゆ
と祈る未だ夢らへまゆゆ申之申之

て落葉のふる葉も太丸をもとゆく太丸をもとゆくゆく

を連す。

一脇部村 神御村のゆくまくす

ゆくまくす

ゆくまくす

一脇部村のゆくまくす

ゆくまくす

ゆくまくす

一脇部村のゆくまくす

ゆくまくす

ゆくまくす

近江輿地志略卷之七十一

一神御村 神御羽岸二

一伊庭莊 伊庭村鶴鳴村鳥居町下伊庭村四

村と下美ヶ原保元との境よりまた伊庭庄と鶴鳴庄と

一伊庭庄の庄代ある保元の境

一伊庭村 本庄の山あはうす村鶴鳴村の名ふ

ゆくまくす三河と下美ヶ原の山と本庄の名と

柳の山あはの山あは山あらうの山の山界すと山の山

あらうの山あは山あらうの山の山界すと山の山

一 帝殿跡 伊庭村より有内者

赤照神高及

名傳御上源のありて此地は族姓と

奉る

たゞよ

三月御祭と申す

此地は御上源の名傳御上源の

カリ彦才十石又二十石四十石より封體を也

ちとくちく洋の古面

一 伊庭氏古城址

日付より伊庭氏の作より七代の

御般使四百疊浦脇行実子孫やモ内様の爲に落成

一 伊庭と申す

伊庭庄内のかずらひハケモト庄

トムウタキタリ、連漢足也

一 八王子神社 伊庭と申す御主らを奉る神也吉八王

子のゆ、り神も

一年限天王社 伊庭と申すハケモトを奉る神也吉八王

ましの玉神園年限天王より神もト申す伊庭庄内の

音士神一年

一 多武大明神社 伊庭

一 納室川村

一 与樂大明神社 伊庭村のゆきも多武大明神の村の名え

のあともとゆき千本十一面觀音の像を供太子の邊(ち
一祀)日吉も五重塔太子近辺の山より四十八のちゆと
一達(たつ)す。あともとゆきの最勝(さいしよう)とくわづ

一大傳(だいつ)

日本(にほん)より島嶼(しまとう)の大傳(だいつ)ともいへども高
三百四十年(ひやうじよんねん)ひやう大す原用神師(はらみつし)竹刻(たけく)のゆゑ(ゆゑ)始(はじ)め
も油(あぶら)のあらわし(あらわし)を水(みず)年(とし)の將軍(まきぐん)と特(とく)異(こと)る
奇(き)形(ぎやう)とゆく。はく木(木)の猿(さる)形(ぎやう)の木(木)停(てい)止(し)と又(また)和(わ)年(とし)
種(たね)とゆく。左(ひだり)は序(じゆ)。右(みぎ)は世(よ)替(かわ)り。右(みぎ)のちを表(あらわ)す。右(みぎ)は
信(しん)孫(そね)とゆく。右(みぎ)は多(おお)田(た)時(とき)とある。但(ただし)ゆく。まよのよのうる
一年(いちねん)の去(い)て延(の)長(なが)師(し)も用(もち)一(いっ)幅(はく)面(めん)の佛(ぶつ)觀(くわん)つ教(きょう)儀(ぎ)と

せんもと子供(こども)の佛(ぶつ)像(ぞう)とおもて處(ところ)室(むろ)と同(ひとう)年(とし)雪(ゆき)再
鳥(とり)奉(まつ)り。侍(しやく)とも。桂(けい)芳(ほう)と。祥(祥)師(し)と。勧(げん)りゆく。うきくす
一(いっ)のうちの院(いん)と。もと。祖(そ)を。方(かた)わちの侍(しやく)と。後(ご)奈(な)良(らう)室(むろ)
そくらうとも。

一五十九年(ひやうじゅうねん)。豐(とよ)浦(うら)行(ぎょう)庭(てい)の最(さい)す。豊(とよ)浦(うら)とゆく。侍(しやく)二(に)
月(つき)と。多(おお)海(うみ)と。國(くに)戰(たたか)ひ。しゆみ方(かた)あす。給(き)士(しじ)戰(たたか)ひ。ひよし
ちゆて。与(よ)都(と)のみ。ふくらむ。の。ねを。極(きわ)めて。あす。給(き)士(しじ)の

君(きみ)

一(いっ)絹(きぬ)用(もち)

ああ(ああ)の。ああ(ああ)

一(いっ)山(さん)五(ご)筆(ひつ)と

川(かわ)舟(ふな)と。木(き)市(いち)と。界(かい)村(むら)と。界(かい)村(むら)と。界(かい)村(むら)と

ち村は向村にて村は向村にて村は向村にて村は向村にて
も居ますのでよきものかといふ門草先生が用ひてセ
里のあ村は向村のあと並へるしらべりのあヌ
の後、海うねる前のそレーツキ（飯山に根は向村の
本からちるを下落する）とかつてアハナ村

一
西美村
カノ佐のカニーとも雲うる
せ

一 営業日記 12月20日
12月20日 沖縄村の十角商店に連れて来た。沖縄とちよの沖
縄糸の販賣の取扱をうながす。沖縄営業公司の社主
の河原のあきらへて、この連絡がなされた。

秀島王子の歴たりとソハ後ねと島ト松一株カレモム
セシテト秀島王子の後ねを元伊の名代のあらわく高
幸トモカレ後年入金賃本書せ

大都明神社

之御子也。或云有皇子。川崎王子の事也。
川崎王子娘高橋郡川崎おはま。凌雲院。小糸。山口
正一。三流。才人。近作。修業。ノリ。

軌徳寺　因山ノ山有海老山乾法禪寺と是處弘
守のあキシニ聖因ち子の建立推古天皇二甲亥の年
土面千石十畳の院も竹基と苔蘚の多と妙巖山院寺の山

蘇幕ナリ

一 金木村 や蓋村の北東山より 桐侍聖園ち子南村も金木
をり走るよりとて村の名ともよぶ

一 海岸寺 金木村より海老山海岸寺とあひて寺と云ふ
と聖園太子ふのゆ山憩息ノリム勧場と曰傳をもくた甚後
ト太子山邊よりあとと一寺ともいひもので平川流を走る
まふ 俗不東寺と走るが傍さ村の名と波山勧場聖園
松の坂、若て力あれば太子山ゆわめて勧明王の化現城
寺とて高麗聖寺立一ノ山の生長らうせうて堂金龕
岩馬とナリキタ奥宝治院海老山海岸寺とまとう海あふと
の

かの金堂清光山海老山寺と号す

一 左官天神社

金木村より多の神萬五個の臺窓

一 萬年寺大樹ノ枝陶山山中也て寺渡拂トモト鳥アキリ
ち猪タクサキトシ中せりやけり沙倉して金堂と金佛寺
達五の地ナリと奉金寺より三月廿六日よりニノキモ
大祭礼ナリ今モナツカツ佳久五月廿九日流落るハリナニ相應也
一 帝田村 金木村の東北山

一 金木村 金木村の北山あり

一 二里村 金木村の西山あり 奈良五代里十重村もと同ト
を初先御村保里の故、或は

一位田村 桂彦村東南山河

右馬身 石馬身村山有 織山石馬神寺と申す年紀山曰准良

皇の元甲辰の年、金龜を子近江國の壹場を據て伽藍を創り、
しゆふ古所謂良馬の地道より壹里半とのことあり。由ひて猿馬、
ありがれを信して、ちつと小早門とて、地より止りを子原地の主なる
を乞く。一寺、生州刻。一、織山石馬身と号す。たまよ蓋しとす。
れもう御山の跋語をさむ。因くちもくあらまみを寄す。
てと猪門地中下あまみ高キ年、高丈六の巴は既惠名の地也。前
土面觀音大士而高望應を孚の仰。名長谷ノ太歲法明王四天王

名モ戸人傳鳥佛像の他十の千照大士、寶珠を子の地廢寺。今存小
聖堂作圓羅大士、竹條山築基外、並えられ。之信様韋文の
精舍なり。小里相半はとて多く是虛空正保元年、唐
土師中島文。赤麁神君の下、竹門て森林内諸段之斧
かき。しりかみふらん。塔中、慈王流、赤麁虎也。威也也。是
み馬の石、いわあと想みかど有へ。次被智丈石と、1日の後也
むくの如御お奉よもをはきふる。是
爾明神社。島主の後事。14年早春。うとを西を、の

丘佐界

下星村 七里村の西へあり 四字院又名新星と有り

とハトノモロ日吉と云ふ

正瑞寺 下星村より右前を天名ふ人より禪寺と云。

中興寺 荘院 梅院とも有り

忠善寺 因寺とも有り

町屋村

達部莊

朝堂三股村からひし中村東村木流村平井村
中村南村北村上星村厚壁村洋野村保村八星村以上
十五村をも古河連山 神社の外廻りから有之未達

郡の庄と有りと云ふ

朝堂村

市田村の東の山ノ内に在り

三股村

朝堂村 北山有り

中村村

朝堂村の東山有り

野村

朝堂村の東山有り

東村

下星村 北山有り

木流村

朝堂村の東山有り

達部寺

木流村より用塙真鹽上人有り

佐木の段

達部侍内石敷跡 あ流村有り 建部侍内賈文
佐木の段

は人の下流たり是侍はまくらう人あ門番は

下生村 あ流村 北より

弘誓寺 下野村より 教皇を祀る寺と傳承海古寺
神龜の菩提寺也

平坂村 宮井村のあらあ村

小松寺 平坂村より 本堂般若相侍や松葉屋の集
会ありとよ嘗重慶天子より寺名を賜て平坂也

延福寺 いのち萬年寺としての一員有利とよ重慶が生繁多ちり
とくす教皇は在應王山へ表金を送り 墓地費用をとどめ
きの草を送憎むて之の二日を史ふされを棺と見利

中村

平澤村の東山あ村

西村

平澤寺村のあ村

北村

伊勢延村 伊勢のあ村

伊勢延村 伊勢のあ村

達部大明神社

伊勢延村 伊勢のあ村 多く御事あら船 達部

めゆと同林こありとしもれ言とちーきり

上里庄村

伊勢延村のあらあ村 日吉社あり用ぐらとて

猪主者流の日吉奉とちほりとよとしの地の産ううテ今

廻敷あらわ村

日吉主權現社

上里庄村よりとよとしの地の産ううテ今

廿年四月

主權現と曰ふ

原摩子村 上日向村の南あつてすより周ぐ名を
原摩子村 原摩子村あり賀佐を子達の山地を子始
榜木山天王寺を連三ノ寺すとま山のちよて原モ山
ヨリ井の谷を下りて北を源の河とよま山本寺を連三ノ
原摩子村より北上するが有ることをもとと爲モ牛久
埋立つてあるうち朝霞庵塔院寺すり山から去る
を余へ莫して佛前執事あ時祥家ゆき寺の東寺すあり
一演跡村 原摩子村の山幕トカラ先古高聖徳太子
原土と云ひては此有利とも。

根村 北村の南へ行け

八日市場村 演生村の南外川の蒲生郡トの所第アリて毎
月八日高買ノ群集にて市生なり。阿小村の名と云ふ。高
昌の名ト云ふ。市生原摩子村の西より高東寺を付く
高馬山高湯町白川より鍊金小川の上は八日市の市也
る高馬山高湯町の江馬山奈良山より鍊金を経て高馬山
漫倉へ下りて牛吳山廢寺地より北上御船山多
岐りある。高馬山奈良山より北上御船山多

一
柿柿園庄 石傍お侍清和天皇の之難高野主山石畠
まゝりくさりしはあらう柿を植て柿をもとめし者

柿拂園源と柿の拂を社とまつゆうと名前は
柿拂園公文書の拂語もて坂の拂葉を威色し朝主皇子
拂庭左衛門の墨を拂庭とす年一月ノツテ拂庭の拂
主拂をあくはいと坂の拂園と拂庭の拂のとよと有り
主ことよ志摩郡二井寺村山内村とふれり威色
治の年号を年号と年号流しと有りと親王門流がアリのゆ
ヘサ刈柿拂庭左衛門のさぶ村トのさぶ村合て
大木とこゝも西叶野田もよまで立木とちりりも見月の
塔小瀬て伊勢の小島までかの庄内村

川合年子村

根村の年子有り

一
柿畠村 川合年子村の東南より往古より御田植地として
年三月の拂の墨を拂葉と拂樹の拂を拂及 無らくる
送名あり

一
拂川吉拂社 川合年子村拂の中弓より北より御田植
大己美命よりお侍神所にはある次大己美命生季
をそそりも丘穀をそそり草をねむる拂川 拂川の
拂名より拂寒の上人の首流を止。うちを拂前と号し神
事多々とつり古例の拂流荒唐ありかの木松の道ハも斜
の上にて和束川の邊をあて拂園と號する川の名を
拂川と云ふその拂川の道ハまづ度拂社を下拂川庄の拂

社と名へありあり明

一 石松社 同前アリタケノミツル 天海ノ神

一 石松社 石松社の事とす

一 塙川百首

顕仲

芳ふきく涼しくはるかに石松の社のほとりの風のあつたり

支本集

ニモアシテ石松のとう年生きて神まことあひゆーまを

外村 川金子村の事もあり

上野村

川金子村の事もあり

一 度呂村

一 極法寺村

上野村の事もあり 古方極法ち

一 又くもくのまこと高鳥のてんごら 墓和名わよちの仰名

一 やまと尾伏矢物信高男のを、曰極法ちの別苗太徳曰明

一 月ねる音年日極法ち、近江玉神信部東の郡を領て上

ヨリ、みゆ辻とひく極法ちも、もじゆむ信秀も

一 五ノ里 極法ちしとすく入の島所の傳ふとせども

一 ちづれはくのぶの名あ

一 高麗ひす 畏天多紀田四事、高麗以西済百姓男女萬

々々、附近に至神示那、育毛野、毛野、沙門野、高

テニ邑名を以て里と云ふ者をもて河内と連言せ。各自の事務も

一 木戸村 二 安藤村 三 佐野村

一 中山内村 二 神田村の事ある

一 木戸村の事ある 二 国守村名と近江原氏

聖島の事ある 三 神浦石川の事ある 三 木戸村の事ある

久須

一 上村 中山内村の事ある

一 林田村

上村の事ある

一 尾田村

青村の事ある

一 寺村

国田村の事ある

一 木戸村

中山内村の事ある

一 長代村

辛朴村の事ある

一 木戸村

辛代村の事ある 二 田舎子村

一 沈田村

辛代村の事ある

一 吉光寺

池幸村の事ある 二 木戸村の事ある

一 木佛寺

木佛寺の事ある

一 念佛寺

聖寺村の事ある 二 木戸村の事ある

一 老手あ算の木戸村 二 木戸村の事ある

一 山上村 二 木戸村の北山手木戸村 三 木戸村の東山手木戸村

一 木戸大明神

木戸大明神の事ある

一 木戸八幡社

木戸八幡社の事ある

一 相巣村 上岸より全島をめぐりても知郡の西ド^ト
チ麿の東地アリモ多那水原キミト佐東シテ全く此相巣
トヨリお魚或リ巻石小はシ。無序村トヨリの内也

一 利宮天明神社

相巣シテアリ

一 宝珠庵

日モシモアリ

一 臨濟庵

日モシモアリ。多那小寂室和局の本禪

一 トヨリ

一 和南村

日昇の南カリ

一 左目村

日昇の左ホリ。延喜ノ代の昭和ノ

一 トヨリ

少トヨリアリ。トヨタニ虚妄海辨トヨタニ波

一 トヨリ

トヨリ

一 美宮神社

ナリシテム

一 雨明神社

ナリシテム

一 トヨリ

トヨリ

一 トヨリ

トヨリ

一 トヨリ

トヨリ

一 草尾村

ナリシテム

一 トヨリ

トヨリ

一 大石の里トヨサ。神社ある有

一 滝 宮

滝の傍ある大尾大師社トヨサ。

一 四折檜原社

四折檜原社

一 石動寺

日向のまきの山が東も

一 龍女社

滝の上を走るのをまほ銀の滝高き萬丈
五層の御滝中の滝うづ滝ひづれ滝とて高し滝並

五層の御神水

一 蓼畠烟村

蓼尾村のあやめの下に萬葉の里の宿ひぐらし

あやめ村

一 杜葉尾村

蓼畠のあやめの下に萬葉の里の宿ひぐらし

一 千江滝

杜葉尾村の下

一 神剛社

日村の奥を下りて千江の下に萬葉の里の宿ひぐらし

一 江のあゆの呪ケ原

神行劔のあゆの下

一 江のあゆの呪ケ原

神行劔のあゆの下

輿地志畧卷之七十一

近江輿地志畧卷之七十二

膳所

寒川辰清輯

愛智郡第一

一
史以もと智の縣名號を舊——ニシム史云國史云或ハ依智
志智の名号トヒムリ今キテ多々智の字ハ用カモト
多カ利ツク因ル而シテ後法王因ル御名ツクモハ
アシナリト附ヒ面都西山ト黒川陽子ト祐智郡の坂
上之ト乾の湯ハ明木タケヤヒ良湯トハ至都の
坂上接シキヒは智の坂坂田山ト傍希也この名
も葉と乾とはモトテ良と押ヒハ短トシタヒト

節良田中下林村のをとてもせ形こひと、被
ほの画かの名く、そらとく御しむる、卷に斧
庵の行ふて、とくはまくあひと度、鬼谷本
畠の弓のあとを、とくと便さむ

一 日夏莊　苗部の西極を、神嘗の中弓、うる葉之
この在、大莊にてもむかしの二郎、かきく庄の
葵の初巻、記せりく御限、も半身、逃れゆく
ハあみへ、夢むら庄、すうすうと、洋と御庄保
の糸、レテ、藏にすうじ日暮庄とつり、以上多分せしる
経せ、上手虎林下平源村や御せばし、と、而御行

一 西山村石を、村南町は、望と、モ多都く、ゆけむ村、村
すに木、妙事、も、お氣し、し、翁井村、あ田村、らんせ、丑信の
村ほ、鶴井、と、ハ、ち、御、と、合、て、二十二村と、日暮の在
と、よも、御の、せ、ハ、ち、御の、降、下、を、い
一 岩瀬村　神嘗の、及、行、神嘗御、も、岩瀬村古
芳都へ、と、な、と、

一 高畠村、御、行、或、り、田の、神、也、と、本
村原、御、御、令、の、事、も、ハ、高、田、の、文、事、と、申、い、と、す
万所、御、御、令、の、事、も、ハ、高、田、の、文、事、と、申、い、と、す
な、と、と、の、お、達、と、ハ、田、と、と、と、

高麗の文字より「河内や多神」は「かわち」と「たかみ」の
邊から田の庄に田をうへと古御へりと曰田町神
のまくらへとてくへと土佐へきく高麗の神社と
之を神主と日向の神社と曰御と日暮とて庄
そし日向の庄へと高麗へとてたのまくハ貞治舊あ
れ行くも

一 河内庄 高麗神社の迎とふ

支本集

兼仲

久木の木家にせんばと御とて、河内の事と度未だ
一 河内庄 因御とふ

支本集

俊成

一 河の安らぬのをへてじ荷へて道へるよとて袖へ
一 西川村 おほさの西へりと
一 ひ豊野村 西川せの山へりと
一 上多野村 ひ多野村の事へりと
一 塙へりと 上多野村のツラうと或へら傷むとて土佐
ホ代天亨三年二月二十日將門殿位をとて昇殿
の算へ様へとて虚偽の證と控訴へだすも
一 五年流行 塙へりとある

一 上年(承和)五年流行の事わざ行)

一 善神山 上平陽寺下平陽寺の中間に、行者善神

竹古寺三善神は多けり。後は山と上に山
かかへて善石神とよまと善法の善とけしと平陽山
とよハ將門を遣せし將軍隊とよこの將門を
守護川と平陽と善と事あり。又其子平陽神と
よばらとす守護とよと傳く所今善石の傳と
中世善四神の授殿とよハ南と都ハ韓崎西二都ハ
白髮神をゆニ都ハ本のち中四都ハ善石神らしく
ほほ川と處とは傳へらる。審法を經て後遷俗
にて中村城主と名す。二代目とす。

前の仍善守用いがす

一 平陽山善石寺 善神とよと善石と曰行基善薩摩
老卒とよと善石と曰行基善薩摩
早年の伽藍と建立と善石と善の院とと善
又と善の院とと善石と天皇室御の一等佛法
東側と善石とと善石と天皇室御の一等佛法
代本と善石と天皇室御の一等佛法
善石とと善石と天皇室御の一等佛法
善石とと善石と天皇室御の一等佛法

要ひきとも候故守もよも庵四傍り十日年会

佛寺精ら年滿年境う

大谷天明寺

延喜寺 保ノ森神山に西之の伽藍う

石年村 塔レの西少す古行古芳石年と多はれ
キ行と少々多洋多神山の西洞石年めいと岩窟
ウ岩窟の中少々殊勝の石佛行古芳石年め佛

像うちうや

サ初村 上年區村めあう

稻井大明神社 サ初村行多神山まくわす

一

金剛村 サ初村めあう

内裏石敷 金剛村めあう

波くとく

彦馬村 金剛村めあう

丸町村 上年區村めあう

木山村 丸町村めあう

海原村 丸町村めあう

宇治川 うひい宇治川の文多より原ハアリモフ

とも多くをゆせむと於て一元より一ちたまし

（）かく靴と院と今をあはせ門せとよとく一席と
あり一つを矣宇の邊よりくにゆ田村のちくらく四
流まく一とうとお印せのふとゆては風せのあ
と達（本レシテリツトモル）據（ハ）セのあとゆて開（ハ）
入り

中リ付 林レシテのあく

洋良界 すレシテのあく

何至せ や良印せのあく

一 嵩山莊 先信ノナニヤアタノソハ吸和名松ノ要
セ郎ニ戴

一 離却 リキサのあく

一 大領社 告や大祭堂（モレ）土俗ハ築升於庭（ソヘ
一 緒（シテ）天宮天皇の御事大伴の邪坂羅麻呂と近江
の大代とよもと主と多（タカ）ヒアリ詳（ハシ）テにとつて
移（シテ）居（リ）テ多（タカ）ヒアリ都堵年（タカ）ヒアリ
多（タカ）ヒアリとよもと主と多（タカ）ヒアリ都堵年（タカ）ヒアリ
一大門村 ゆもしの東（モテ）

一 肥甲村 ゆもしの東（モテ）

一 古跡址 行（ハ）セトウリテヤ風高中年左様（ハ）セ
古來年中（ハ）セトウリテヤ風高中年左様（ハ）セ

承原の故に萬年一興力を以て其義復義禦之五十
八年梅平元年ノ月を草子ア音川モ音川の水と
セテ入承原ニ年ノ月をもと水攻メト候于五月
アヘリナ彦水ノ石急流等と水勿メ候て運を乞
ムくその後承原が後野山が母守在故モ後長谷川
ガタヤ立候

一一三毛ノ祀向セリアリテ方川の水をナシ土
俗或ハ三毛サシス古倉庄ノミルト殿ナシモヤシテ
高也御セ えリオツツモツツ

一一輕井神社 えリセ懸カツラニ多神洋ナシニモ

天孫彦ミト天孫天ノ御考ハウ四方多代ト云所也
モトモ今ち一町四方ノクレノ移給歟便ノ多神ニ御モ
日牟紀神代キニミ算リ是數ノ川上ノ御事モト
リシムト後は此ノ事モト一ア史一後ノ云天
若御多神トソトヨトモトれモトニ化多原ト更ニ觀
ナヒ年二月ナニ壬辰後迎之ニ而古佐上天若御多神
往五條下ノシ又一後ノニテ山桂院ノ代ノ稱トモ
左ノ事年二月上旬ノ日よりトソ朝リテアシモ
アシモ申シテ此ノ酉ノ日半アリカツモモトモ

一 帝釋天 玉如意珠を高舉りてやる帝釋天王

五代古事記傳寫して後も未見於上後多々含義
のとさしは至る寫得をとて一帝釋天の像を豫
し堂佛うつとてよ

一 ほり 三ツ井の主、ワ

一 枝り ほりの主、ワ古事記傳射と云ふ今も
男ノ枝れ枝れとのとくを傳古事記の也、左行
モ智の千枝彦と云ふモト

玉屋子集

佐芝

彦ノ主、千枝、岐阜彦山の主、久松氏代のちも

猿木子集

佐助

神主の名役の主、ゆきとくにわの鳥居を守る

中島村 大門村の主、ワ

寄附村 中島村の主、ワ

一 石部神社 寄附村の主、破壊土居二村の主、坤、
延喜式神明帳に所謂石部神社と仕立じよす
あひだれ、く申す御、と、一とし今更ぬけたる事記
ナ、御主御守方の主代として、主を寔殿うつす、
乃うと終年を申渡す事、御行は申す寔殿うつ

信うと少本とし毎年三月初雨の日神主とて

改教村土移せ一筆を改教村とちりて石移り今之後
却くを直し土移せは古より土宿り今之土移と改め
一 豊酒井 中高子の馬車

一 王海大御神社豊酒井行十七村の主土神 王海神
洋々走り多き神 豊酒井と云ひ其移ノ内
度く神を移す事今ハ其用兵移の事少ひ神せば牛
と用ひ、トテ左ソテト右ソテト御シテ今モ川原
有るの富海寺へ之豊酒井と書面の移信を拂ふ
重利門の跡ノ川原モトシ

一 のまことに も宮御使事よりおゆ上入事もきく
一 豊酒井の移住ノ事に於て今之豊酒井にて用ノ物の
は水行ノ事もそへたまのノノ新の正更の彦翁もよ
しを吉川トヨのまどりの木との傳承のものも
古俗云平教王將門はかとて而方の傳とはひ天國大神へ
傳説あり自ほ移ひたノル也れハ當リトアゲリ
と云へて吉井もと天國大神と將つ方の釋をばひ天國大神
で般もとあくヤ改める部と是れがねと改めし
や又トヨウノ事とナ將門をも良久とぞ要

と云自殺もあつたる事一多をうやううに筋筋の
左矢きくし中へあがりてうかせとなす。士もえ
とくの事うすはは不飲のうとよそく、此筋の
筋ももしむかとハ毒うしてうかてうきて飲
向うには紀伊小高山の奥玉川のうちが敷め
筋は太郎はみ川のうの傍ノ碑と見て玉川を
はやちゆく筋人のあせの次の玉川の水碑
筋は太郎の墨は作手を慕ひてはその碑の代りかふ
碑建玉川一キミ

一 東京学社 そはゆせのあくわ

一 玉川村
すら遠の野くまゑまきせの西わう
一 やはうせ
やはうせのまくわ
一 菜園院
やはうせすらはまくわのまくわ
一 常福寺
日やくわくはまくわのまくわ
一 中し
日やくわくはまくわのまくわ
一 の薬神
日やくわくはまくわのまくわ
一 長じ
日やくわくはまくわのまくわ
一 二信主傳鑑滿四郎
日やくわくはまくわのまくわ

系と稱上史（十音表聲）印傳（印傳）のとよけいの
系と稱上史（十音表聲）印傳（印傳）のとよけいの

今ト錦も陳立番のちしト包かほしよ

小窓刈村 長じるの草刈を行ふ

一大玉莊 足まく土佐も大國の庄と云ふも吸和

名抄一ハ大國の郷の多ひ歌に

烟田村 有情もすのツツアマ

芝學寺 烟田せうり 滋をふらを却ちも清寂
院のあぢうり

平志村 烟田セのツツアマ

苅田村 平志セのツツアマ

金子村 英アセハツツアマ

一一一

市じる 金子村の西行

一 壁部村 金子のわすれ古き、石翁の文す今ハ改ひ云

一 河之原村 壁部セのツツアマ

立移村 いそ原セのツツアマ

一 積善村 宝弓川一ツモ立移

一 四輪村 ほん僅村のツツアマ

一 五甲村 四輪村の立面を行ふ

保慶集

後成

セノ木ノ吉田の山ノ植田へがまく声律の詩ノ文

名寄

医房

晴雨や風の吉凶の事の如きとまじめ前半は篇の如くかまへず

新川村
主なものをあわせて

栗園村 沖川村の事

上信或八押達多之云能以那和妙之神

蓬萊鄉名錄

清平行

岩窟

十八ノ新行ノ山ノ谷ノハヤカニシテ
平地ノハヤカニシテモ自古ノ上古ノ定居ノ邊す

心善堂

新章行の名

本持ノ村
徳子君の心事を行
今を家村
あわせの事と行

傍傷村 今更氣のあまう

平松村

因村の面う

下ノ木村

ちわ村の面う

中ノ木村

ひと木村の面う

西苦我村

ひき我村の面う

移多村

西苦我村の面う

移多村

西苦我村の面う

西苦我村

西苦我村の面う

十代村

西苦我村の面う

梅澤村

西苦我村の面う

少ひせの山車う

梅澤村

西苦我村の面う

歟野莊

歟野郷の久留知多村かふ今ハ歟野

の庄

の庄

沖山

考古村の面う

金の石村

ちわ村の面う

金の石村

ちわ村の面う

郷と

まろな村の面う

郷と

まろな村の面う

郷と

まろな村の面う

安藤村

ひな村の面う

一画もせ おもひて お種をせのゆうり

一あかせ 画もせのあらうり

一车家の神社 あかせのゆうり

一多度の神社 あかせのゆうり

一常ち年村 あくたのむらのゆうり まき行方トホル名とく

一常ち年村 あくたのむらのゆうり まき行方トホル名とく

一作名父村 あくたのむらのゆうり

一烹食村 あくたのむらのゆうり

一少數村 あくたのむらのゆうり

一高段村 あくたのむらのゆうり

一高段村 あくたのむらのゆうり

一假せや村 やせや村のあらうり

一三敷や村 改せや村のあらうり

一松尾村

一金割場寺 松尾村のゆうり 土俗松尾村のゆうり

一辛記曰此は山野を多那松尾の金割場寺也

一要我天皇勅額新天年九十年丁丑行基蓋慶國至

更大師塗山口東三室瑞伽造綱天子御令印新緑

竹園墓後毎年燒之和二年乙未以是今年迄

十五年毎同姓者共之而燒之要我等御基蓋慶國一刀三氣
佛作昭十四天王作大師事作坐大刀七同四面

護ノ寺不動明王多羅大師作三重塔大日如來
坐大師作三間四面、文殊堂也。運慶作三間
四面鎮守。三面作三間。迦葉也。般若也。奉安日吉十
碑仰之。方丈西樓。三天蓮座。坐二方丈。足有鐘磬
音。二間各方丈數十八步。內一列衆徒。大師奉安
而滅眾所。一部師弟。坐東向高處。石天柱。木山牆。小一
乘寺。曼珠院。師門跡。師事寺。くとく。

一
一
一
一

輿地志畧卷之七十二終

近は輿地志畧卷之七十三

モダ那身ニ

岸本庄

モダ那身

多羅大師の西。行者也。

モダ那身

多羅大師の西。行者也。

モダ那身

多羅大師の東。行者也。或ハ多羅大師也。

古跡止

多羅大師の跡。不詳。本集復り。

中ノ木
鶴の子の木

鶴山集

萬葉集

蒙古の歴史

比原村
中之村の少

比奈村

西漢子
比丘尼行持傳記卷之四

巣鴨の事

菊池の月夜
比原せのすかうら

花人樹
南歸北來
也無風雨一株立

至樹と古ちの事久をいよに只花の花のみ承とふ
其れの彼は久く花争く事皆とて秋葉原御所を行上
宮太子右衛門と連立一自誓と云右連立もどり
てゐる御年差數百の吉原にて退院せとくはま
樹高さ丈八にて其は二本の彼乃と花争つてとて
咲開の若と二本も二本花争つてとて其は
もとへばのゆく茎長をとく今又うすら古ちの花
中へ移入はとくもとへ一圓ニ丈餘の本と花
ハ未だとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
花と紅葉と佳親うと夫生もと生をと終承と

生せし妻女う

一 やなほせ あなほせのゆう

一 花ノ樹 やなほせう 事ハ花の花も木ノ木

のありともう

一 蛇ケ庵 そもたはその蛇合う ぬきゆせ
かへせり今ハ圓の木あゆま て多きよみ
そもすまをよのまきのくひゆ

一 玉里セ ゆなほせのゆう

一 稲舍ミセ キ軍のちうり 田舎をわの下らむ
ハナツラツラ田舎むね守候う

一 湯屋村 流舍まゆう 田舎守の下も
百人守とすけや許り お代古者石野守松之助の時
もとの又因とて浴舎の湯うりとす

一 平柳村 ゆる村のゆう

一 百人守村 平柳村ゆる村のゆう 田舎守つる
うといゆう勢も千人守のサク多大の守とくへ
とく小名うり上うり柳村とおは少佐あ村とゆふ太兵村
ちゆうのゆうとく平柳村のまつもとく
さすの内をふとて守子飯子千人守立村を守候

一 百人守 田舎守ゆう 稲門の百人守とす

續記曰推古天皇五年丁卯至佐太子即孝劍而厥
國信惠聽道欣記勒等依太子令初任國以奉事者
流居世之勒取所取之十一面佛等大士即太子即明
利長八尺以生本不載切明利相得於樹古考七
掌伽藍學又又銅車及內率之方近世是謂
衆伎三百傍山鄉藍藏另政所一堂衆又智西摩外
陣之方近世是謂寺中又滿燈方三百傍比致中即
門宣秀御明應七年之通見明應七年戊午八月廿
號寺名惠寺一寺時寺因方記錄等述燒失因之
唯存寺舍三面一百傍含一室寺後土而門院即應

七年八月丁卯和子修補伽藍再興輪旨左中年在列
宿之本氏相下知宋正之年甲子四月二十七日四至傍爾
詮文書督經連和尚守氏豐利物同義良多賴而
裏利宋云十八年辛巳七月一日僧尔少方禍同義秀
義賢而下知宋源云年辛酉九月大寺四至僧尔同賢
多相模守賜度利物云其豈布守空之武判物右四
至之肉凡东二里南小一里田畠今方高十七百五十
斛余者少也而源十五年戊辰九月二十二日如前
乞行令益山林住内多濟倣而彌也佐長公序

之年癸酉四月廿日。吉故居信長公墓。予感元
以再興弘教。所以事妙在天。乙未年。乙未高年。再
興少室。建立雖於慶長七年壬寅。延二十八年之方。
至享禄五年丙午年。中。壬午。领之。万函所地。頃付和山
主塔。久在帝室。致物。要後。号。相。左。智。同。十二
年甲申。從羽林左近。替。舊。官。改。右。童。宣。建。立。同。七
間。株。札。左。干。今。天。己。十。六年。乙。酉。十一。月。大。八。神。塔。都。而
固。跡。打。住。田。中。又。宿。古。故。客。附。忙。核。札。之。之。而。後
号。多。部。如。將。于。乙。十。年。壬。寅。當。如。行。令。寺。家。同。屋
數。高。罕。云。石。五。斗。以。帶。五。捨。石。勸。高。五十。石。合。百。口。十

壬午。中。從。年。一。可。所。務。之。上。句。 壬。午。庚。之。作。年。庚
信。左。馬。報。續。判。物。二。通。右。事。領。金。少。林。信。內。如。第。上
紀。信。史。同。十七。年。壬。子。丑。月。二。子。被。為。出。之。但。比。而。第。年
表。考。右。之。而。更。高。多。金。高。而。不。之。佛。釋。文。
東。熙。神。君。而。系。系。高。而。代。之。於。右。之。因。像
作。序。不。辛。也。圖。艺。寺。利。物。一。通。至。寺。章。第一。通。竟
永。十。年。甲。戌。八。月。十。七。日。一。通。益。限。大。师。王。海。而。否。出。明
正。院。帝。宣。之。水。十。年。丁。丑。五。月。二。十。六。日。當。奉。寺。宣。建
論。皆。在。大。辨。在。荆。右。之。古。記。车。子。宝。而。之。此。开。佛。經。

龍谷院者山科幕布え現住喜慶院ノ号西濟寺政
所喜慶院自坊庵庫故元主官寺判物是利家傳
判物皆之本陵井等判物甚少數筆台輪廻古筆
類多空也抄多空以之經紀の中庭一筆の哉
うす御承御家宣紙とあ判りとひ又至秀を
買あ下かとひふとくらむとくらむとくらむ
義秀とよ高羽一毛は因生り安法に保年禮三十
毛の法安大年考等とむる仍久とて主人を一毛
はこしと宝應堂とく及やアのち後毛を毛とまくわ
毛の佐木家の跡流をり佐木家毛の一再毛とまくわ

日記山 東山神廟ノ御。右の坊く本多系の毛と以て
御ふとくらむと書てゆる年印ノ付く本多印ノ付く本多印
加賀守事相君の老鳥ノ付く毛とくらむとくらむ

一
毛とち至りて毛ちと年庚宣送毛とくらむとくらむ
毛とち至りて毛ちと年庚宣送毛とくらむとくらむ

仁王門

鶴和田翁桂院社 勅教ノ

參跋天草

印傳所

伊豆毛とその傳り

萬柳子

東山ノうそ

一 りは危そ
一 畠ノキ
一 園冬リ

一 リは危そ
一 西谷リ

一 サキモト
一 ハタケリ

一日吉十津附れ西つもく
但家人ハ王手を放れ勝

少猿附れ御名御手

天神社
ヒミツサリ

大行事社
少佐モリ

蛭子社
リサモリ

岩神社

ウツクシモリ

一 傷白鷺白鷺
あつも大森村リ

要院石効

リサのあみ野モリ

引抜寺

少井通風第十五十種附れモリ

井伊敷員佐直達墓
佐内君母今モリ

菖浦

上中せせせせせせのちもす古御モリ

本宿國モリモリ

千葉集

千葉今水瓶

神父の星の印ト本宿國の日給アシモヘテナシ

玉毛集

佐年

本多國の口づけの内が一よりて樂へくしり事の喫

一 おま幸村 蔽ひのまくらうり

一 おま幸村 おま幸村はもひるうり 墓差喜院の用
奉天をうそば古ハ大代とて山の内省とて古
昔の傳徳のゆきりとの多一今もまむれもすと並記
書房を參院坊の二封には近に幸村が頃礼の十
をもくらり

一 少食莊 或ハ少様の庄作り土儀、又少食の御と

一 一木彌和久松のせんをもほの紙と云追はふ
もも神のくじらをモカリ矣、夙峰延勝殿承

一 猪口 おまつねのまくらうり 神鷹の取
源守景家ゆき口とおまつねつちとよもとをも
少様のくじら

一 外り おまつねのまくらうり

一 千寿河原 もじくまうり 老信を付 惠島親王の毛
童千寿(元) そのゆきとく情くわ樹行(?) 惠島
親王達ものね(?) とく御くは端多(?) 親王のことく
君の細の事りとまことあん

一 幸村 おまくらうり まくらうり

一 東を手手 平尾せ白鹿をとて行ひ町の角塔
東をちとそは海をふたもと少食の萬佛寺は手
あまに向參ら人の足基

一 高仰村 知りゆきう

郊勒碑集

我先の子代は故ノ青雨のまやのれのまきのあら
一 有做社 まやせしのびの上枝花村へ竹ノ木
室の年もハ國と本方道と草引へ一後高
山の年も少食庄近大妻良親女と信長へか
を暖て男子むすび信長國後は男子し竹ノ木

一 ゆくかくとまよ津江へゆくは男子ハ信長のまよ
ハ少食庄近大妻のゆく明葉御名手とほしはす
竹ノ木と草引少食庄大妻良親女と信長へか
之子信之とく五郎と信正長のれと石田は竹
少物とよほす

一 永原手 まよせし古跡名手の市原手とまよ津
海一流の市原と吳の弟と源氏和歌の市原
の文殊舍利塔の会堂院とまよの輪とて
波を藏廬龍門の庵退耕院とまよの輪とて
経記と日丈高とハ波を海を一派のやをりて

代へ勧めても承り難い事もある澤へ之をくと
り之後少佐化の跡を用意経営の後もと
御宿姓を少佐左衛門家歴々七世の傳と化る
天皇御子の御室と號とけ四代人より人多大
時々御室と號とけ四代人より人多大
トヨサキモトヨシ思ひは太郎の再來を多く得てあ
たかく御室のつちとよしとよしは高山の
主としものに思ふ名相因りそひ十五の年家
とちく佛花も附と仰ぐ一はへたの年中附
の一章の下にてお悟りづふお附玉うるのあ東

法聖改元して主御とらむとくへと固御義尊々主
まゝもとえとと名はるも一ノ長確確天皇御子
えを二年庚申某と三十一の年入府中家古林等
の法大宮司と云へ名ら主也とてからく七年と
御と御氣と云ふ事べく西本と云ふ名と
号れやく或ひいゆへ事れり云ひ然ゆの事うきと
主角利官原氏が京師居士をして信作一今の
主院延に王つちの無事とち終く奇附に御室と
連れて一その年十二月入寺も下道を四月とまくと
奉

天下の名僧も多く集うる所で人びと頗る
多様な天祐年延長年延長の年輪を公帽
のち古と幼達を表す希宸館と深きをもひ再三
法要と慶同しておほき語一篇とまことにほりに
歎感しもふとくも外傳伝と徳と能く御縁年
と改められたりとぞの事の多くをもくとての内
彈丸り始ぬると終むとソひゆーと後く瑞石
もまことにとぞの事の多くをもくとての内
もまことにとぞの事の多くをもくとての内
太石

のとく一寸八分の内も大さかりうるゝのものと
見るに國故へもひ思ひ拂へざせむいがま
士の筋角の肉へ送り合せきて彼大不ともかの
人ふゝもく辛肉へりてりてまことに千の力
とて門へてりてうちと舊ナセハ人へてりて石碑
と名はけりかくのうとく今まのうらうとまよ
御子の妻子根元を伸ば天祐はとよ天と林菟院
所守と名はれどもそのうちの四角とソひゆう

芳も度内あるとトキセハナキの所を危運す
きのものと村とまを越原山とひく古事記文
字の鐵の壁としのて御り少のとくに四人を奉
九月御事とひき院と合室と名はれ四人のモモシロ
大年とひき院と合室と名はれ四人のモモシロ
トヒムサヤク松風の所精室と一佐美おと幸と呼ぶ
延長とひき院と合室と名はれ四人のモモシロ
タヒミケ路と子を産と名はれ四人のモモシロ
て後ねんの尊体と冷うて身を絶へんときしきと
參政とひき院と合室の次宣君 恒良

院と合室の次宣君とひき院と合室と
年久とひき院と合室の二年の多大とひき院と
く床とみちとくかとくへたるすとまと年秋
八月後水庭院の令とひき院と合室と
うほ地再びと輝せば水庭とひき院
作の新やまうの難のとまと新家宿の新やまと
拂去はくとひき院と合室とまと自送とひき院
うひき院と合室のとまととまと自送とひき院
とひき院と合室のとまととまと自送とひき院

内境多事勤耳れ、而ち幕々公卿百人中集一處で
夏々ニ付の詔制叢林の御式をうつりて修仰とは
けヨリ日々天子御坐令國事也々と仰りたまひ
寛く面地の世ノ私事よりの意水のみれいづとの陰
昨も第と拵ヤ、主に臺をゆめ立等の二つの名
あつゝ署して威仰は多く山岳修太史矣及今
而ち之往來承認す年五月大字火食等門士軍士放
大之免ニ奉土育方ノ佐長被也後本庵院寺の
女ニ付尼ノ形サレシ時仰祝をもと胸つりす
砌の、うちハ世ノトクサクアタマセキ

人の世のいとまくわざあらへ

故院の事に即ちいふとてまづは前年の
後半の大きさを経てからつづく。か
らとせうすとてうとうとへとて本屋の
仕事トアレトウハ仕事の多きとちのほ
経院危の切とほハかくもあらえく
やく

海をほととおうがのみうきくびのう
かうとめはんりのゆくもとくもとく

かみとみ代

瑞石

一園を望む所の後

猪山種臣秋口もとく尾張守氏村の高麗
應安二年庚戌年八月七日附修了誓く白若
戒律の奉請申とある。とて落成の事は未だ
里をこなとせず。猪山種臣とて西高麗人也
と角之の善統也。

一

世紀文書

白字只因り。紀元三十四年。四年。世

代の文書大士の名。五年。二月。國山勅。道國
府總印。承認。大なる處の懐都。寛。者。故
アラカシ。唐の主の土。モ。ト。モ。モ。モ。

そぞりあへ奉の事の如くをも之の事
てちちと云ひて西行はり又門ちくもと先
人も言ふと云ひてとてしゆをもとあるせ
むと大石のとす一寸の内にたどる山城
きよへり重りのものハモリシテ、歐歌
ひもきらへとまよふとゆむとばとゆの即首の
中へつくるともかく、まよふのを除して、所長
二三寸半と正眼安をのは活省うたひを経て、第一の空
係として、主とて、絶人のれども、爲めに多難煩惱
といふ高者と雖と僕をうなづけあり世間をい

うてお坐候と喜びへりて、世間の現
喜大士とひ能へし、ひびく佐木と角利が入道ま
永の鳴鶴中年滿鳥子も江草とひびて、此等は
かきいささく、御のちほきとさげつて
二六時中絶えずは、萬の品が清酒とひびく者
もゆく。承の豆の豆の豆と豆の豆の豆と豆と
うむちの豆と豆と豆の豆と豆と豆と豆と
感一葉うむとひねとひねとひねとひねと
とて少しお水の豆と豆と豆と豆と豆と豆と豆と
豆と豆と豆と豆と豆と豆と豆と豆と豆と豆と豆と

たはくはむきの力と金へかゝりて姫情で
滿腹を充す事無く世話の向むとけの人とくら
べてはいふまじに又文殊事へ西辛門前
住む内里氏の某年ほりうきてせとほむる事
もありと教をばくゆへて日経するる小
さなれハ復ふく男子二人やまと人といふが
はくちむの門子なりとひらき生むる
幸福人ともれ令長一て共ハナツ修業と又父
家の近道と來よのうしてひのほしとぞ
花見とせはうてお家め風呂吹絶えもと

おひよひ半世紀の思とほくと軽ひはま
係りす事と仕事とくちいれはまきとまき
やくしおれの男子二人またくはうを仕事
と進く之或もの辛くよろしくとくとくとくと
かくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
行なうと作て家臣二人山への原せられ貞享三
年正月育ナキとくはうをひの主計
にて一切物を度及於絲毫私を全乎のたはく
を魏のそく一の初りもつて納文運アシテく
被る數多の男子とほりとほりとくとくとく

てう馬のくそせぬとすかと世地のたまふ
ひびくとよ下りて作るにあつて男よとおへ
男よとわ女よとおへやよとわすへ善間昌二
設欲末男礼并供養觀世音菩薩便生福德智惠之男設
欲末女便生端正有相之女とほも全生などと算り
やまとイソシとの到とての耶乾の冰とや伝ひの冰
墮れんとされま濟王ニの日とくとて南ニ世の生叶
ひとと本と云ふとらはれも大わるハナの本佛
地圓滿トモト悟をうき自由ニ味といひよ則
致はせゆの再見たゞり詳より記す一の年

入唐トヨヒ吉慶七年丙午のとて海上にて
風とて西へ御水逆涌とくと千尋の帆車の
海舟とて北へ御車とてのよもとおし取らうやく
うそどひは御の人とてとくとくうひをまくと
手とく効ふくちとてて室中とてひまくとくと
船とて喜慶忽ち近づくとくと御ふく風やくはるそ
海絶景とくはるのとて岩のよ初面とて後高と
そぞくに竹石の奇勝うるそく房名と改り號す
まろ今とまくとくと御色の無いとかけとけと

一 畠川セ

ナシテモノモナリ

一 高魚山塞 畠川ムニ西ムサハシル岩室ノ土佐ト
高春吉モサヘシヘソニ高春吉モガタリハ四女メ
戻シテ御子トヨリニ上古室居の還シタク
一 政利御セ 本細セのツモアチサシトカラシハ
故にはムと政利トモタクハ少林大活官事有志
仕ウセタヘズナリト修司ミタマキモ石院寺政
新ノ御ノ方ニ政利御シソナリ石院寺モ石院寺
政利トモアシテ院長ノ万代の友トモ事モヒモ
三井寺ノシテ歴ラム政利

一 差宮

政利御サシテ

一 木細セ 政利御セの事ニシテ本差宮の文書有
立春年

篠川セ

リセのツモア政利御セの事ニ

蛭谷セ

ツモアモツモアツモアツモアツモア

筒井天膳室

松谷モサヒ松木御惟モ殿王の事ニ

伸意高氣ト清シテ

アリヤモサヒ藤塙御の事ニ天子の事ニ

迎ヒヒテの藤塙御モ石のモナヒモ延ヒモ日

不確施仰惟喬報主上明利セイ呂萬萬トサモア

アリテ御ニ一モ多原ニモトカリシ。惟高親
王はせ及君細ミ。大本の多くミを御使ミ
て本代活くろと極ムとエリ。モヒはセト
モテのセタリ。深山の地トキミ。妻の古川ハソア
ナ。此惟高親ミ。厚し文德天皇モア。の事トテ
御天の廣足も。アレル。も。アマの事也。モ
セヒトセチタシ。は。一。上セ。一。御。アラヘ
祐多郡の内野村を。寺町の内野村を。御。アリ
今ナ世の御園の。少種の。在。ヒタ。ノ。篤
の御。アリ。上野地。セ。セ。何。は。サ。ト。ア。シ。ヤ

凡下モ。能親。経行。ミ。御。ト。モ。ツ。次。や。親王。ミ。
ノ。天。の。度。ミ。う。ミ。ヤ。上。ミ。ウ。ル。の。罪。の。ク。
ヘ。ノ。化。ノ。上。古。の。神。ミ。モ。御。モ。ミ。セ。ア。
ア。モ。ミ。れ。ハ。親。王。を。辱。ミ。カ。ク。ア。ト。ミ。モ。ア。
ア。モ。ア。ハ。親。王。を。辱。ミ。カ。ク。ア。ト。ミ。モ。ア。
施。仰。ト。ハ。忌。吉。の。ソ。リ。傍。上。ミ。レ。ト。フ。ア。御。
王。ト。ア。ハ。情。ム。御。ト。モ。ア。ハ。御。ハ。接。
ハ。人。ミ。ナ。代。底。神。天。の。多。良。く。土。俗。の。底。ム。以。
ハ。情。ミ。ハ。惟。高。親。王。の。効。活。ア。ト。ト。は。經。也。ア。ト。

一 蝙滻

物考卷之四

一 父子

日中子

一 君細川

源君細川とある。されば川をとぞ

今曲がりて三細せの事よりてやつり川と合

してかあ川と云ふ。モ智川とも云ふ。

一 君細川

也合せのみゆう。ソノ後廢以て此には

更にハ風花雪月の経勞ハ四紙の活版面小字

ハ風紙の活字と云天文の始祖トヨリ白版と宵版
依ふ本多角家の本元もては田井向寺引に今ハ白版
もゆねば小トモ大トモ細行。唯書の玉手役

御ふるとふ士信五代君細と号す。す。惟書親王
坐す。す。名曰とふ親王。而御の御終とぞ大
皇太神と云ひ。又云ハ筒井大明神。と。よ。而
御子彦と云。御作の墨を手取る。而御終と云
又ハ御終と云。御の御終と云。御セタシト云
而御も御終と云。御の御終と云。御セタシト云
而御も御終と云。御の御終と云。御セタシト云
此のニリニ更に旅高す。く。口少食のテ。入。車を
自修せ玉ひれ。而御終と云。御セタシト云。御終と
を入。車を。御セタシト云。御終と云。御終と云。

往々よりおもて思ひ加へよとて元亨二年、士申即歿。五
十四年、君を細く思ひ、是れ十九年にして崩。一月、大里大
山中と名す。もろ惟仁親王をもて事させり。貞
親え年、前。○惟仁親王の崩御。○圓山をもむじ
の行。ねまく却し似思はむとぞふ又せと
きよをほづるゆよと。厚すかくはとせらも
うそちゆく。○大山に終。○今ハとて血まよと。○其の
ねたがと。○ともれり。○大山に終。○少様の大山
と。○少翁と。○少翁と。○少様の大山と。
よ。○圓山の厚らの要の君。○君の君。○少翁と。○少
翁と。

の主人、坂川中納言。○少様と。○坂川中納言。○少様と。
ほんとあるの枝たましく今だ君とおとのね。○坂川中
納言の後おと多原と。○坂川中納言の後おと多原
の作と。○坂川中納言の後おと多原。○坂川中納言の後
おと多原。○坂川中納言の後おと多原。○坂川中納言の後
三月十五日。○坂川中納言の後おと多原。○坂川中納言の後
おと多原。○坂川中納言の後おと多原。○坂川中納言の後
おと多原。○坂川中納言の後おと多原。○坂川中納言の後

筆者の中より承り承王は貞观十四年崩歸りては名
とまふをとどけは後わゆせく兩君す／＼之望二年
二月たり少ヤシトモ薨／＼ち、而奉二十去一既／＼少ヤシ
平九七年二月たり玉薨も御年五十又四としノ後本
方原上生也のあひのひの葬了、葬りも五輪の塔
今／＼少ヤシトモ崩の方へ往セリヒ／＼四後も未
少射の向と名付ケ今達し因の事も少ヤシトモ不
トノリハトモ少ヤシトモ不ノリトモ少ヤシトモ不
トノリハトモ少ヤシトモ不ノリトモ少ヤシトモ不
モ少射と云ふ行はる所の事也ヒテ少射と雖々

の墓亦惟喬のれり行もは脇わゆ法と敵
山の墓とうふたるよも】へ親王を小野
多慶ともかくもあは君相とて薨去もへきよ細る
【すすれば近ハ惟喬親王の後嗣】してを仰す
お堅王の母に従て角弓少林様をもとども少林
今少食のまよし仰はお堅王或幼ち病を内々
神徳の経山城をとて治のひ西宮下上井草に住し
お堅王御子 【御子】少食はうなづれ、天皇とお堅王
は代しておひば比古守を親王の後嗣とハ君相
父惟喬親王のまよしとくもあはむとくは少食祭

もすぞ玉いとどりやく、差戻玉と親王
貞元之年、はくすへ東とせり、十九年、はくすへ
三年、壬申薨去とづかとく。貞元之年、
えとえと三年、十九年、は壬申の年、はくすへ二十二年、
もとえと三年、ハ壬申の年、はくすへ己未の年と
附今の後、様用はたに、夕おもてお堅王へはくす
てはくす、本はへきよ細く、夕おもてお堅王へはくす
く、夕行を終と見て、お堅王は長ノヤ、お堅王は
う、ハ故名と罪と曰え。一時、太政大臣は、の
人致政と誂として、うらをまつて、事がへく、や多に

十八九は後人の教訓たり。古今集に惟萬の序
徳川家、同名のたへりなり。君たゞりはとせ
ゆせよ。行はればゆうばれのゆえと考を
とせしんとくに歎ひの葉少くとめゆく
太平記。ハ貞観十一年壬辰七月四日節ト。わろて
惟萬親王彦輔。この年正月法事と、承延と云ふ
志如信都。と近づて要門の名とまで呼ぶ。せと
ハちくへりとてと近づき、勧教の方へもよしと
多くとぞやう。かく太平記虚偽のまなざしも
考證の所で記せし。もしてはいきと政所細君細

玉子細垣席圓をもせんばすめへ様の毒液
をもくとて今し行某氏の持る細り行
主の細きもの歌して大君の御細ハ自大君御
モト政事の細ちえり政事の細とよしと理
きくもくとてお君といひてはまて惟君の御子差監
王の幸ゆき（ゆき）お君ともすらとおもむら玉子の御見
民百姓みんびやく（みんびやく）て君の細と称せしりく惟君の
御子差監王ハ小食こしょく（こしょく）されどい主紀しゅき（しゅき）に仕
くもとには地じ（じ）高たかと小食こしょく（こしょく）と称
す者も差監王せうげんわう（せうげんわう）かくおとへ洋人物了

のにぞきの民百姓みんびやく（みんびやく）と飯墨はんぼく（はんぼく）と毛幕監王もうまくわう（もうまくわう）
作つくりまさねばなうとふ

一 大皇太昭神代 神細井子行みことほいこあ（みことほいこあ）惟君王の事ことと云ふ
アシトミタ差監王せうげんわう（せうげんわう）

一 惟君王の事こと 仰あけくらう差監王の速はやくや後
人の下くだゆく洋人物了

一 令龍等れいりゆうとう 因いん細ほそり

一 差監毛村 神細井子行みことほいこあ（みことほいこあ）一里いちりまでわづく洋人物了

玉子細垣席圓をもせんばすめへ様の毒液
をもくとて今し行某氏の持る細り行
主の細きもの歌して大君の御細ハ自大君御
モト政事の細ちえり政事の細とよしと理
きくもくとてお君といひてはまて惟君の御子差監
王の幸ゆき（ゆき）お君ともすらとおもむら玉子の御見
民百姓みんびやく（みんびやく）て君の細と称せしりく惟君の
御子差監王ハ小食こしょく（こしょく）されどい主紀しゅき（しゅき）に仕
くもとには地じ（じ）高たかと小食こしょく（こしょく）と称
す者も差監王せうげんわう（せうげんわう）かくおとへ洋人物了

輿地志畧卷之七十三終

輿地志畧卷之七十三終

